TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度に関する研究

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2016-01-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松本, 秀夫
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1215

［課程博士・論文博士共通］

博士学位論文内容要旨
Abstract

専　攻 Major	応用環境システム学専攻	氏　名 Name	松本　秀夫
論文題目 Title	海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と 主観的幸福感・レジャー満足度に関する研究		

主たる活動空間を海洋においた海洋スポーツ・レクリエーションは，年齢，性別，体力などの個人の状況によって活動の選好が可能であり，ライフステージに応じて多くの人々に親しまれている．『レジャー白書 2014』によると，2013 年に海水浴，釣り，ダイビング，サーフィンなどの海洋スポーツ・レクリエーションを実施した人は 1,940 万人と報告されている．レジャー研究の分野ではその動向や行動様式の分析が進められてきており，参加動機，満足，コミットメント，社会化やレクリエーション専門志向化（Recreation Specialization : RS）に関する研究がある．なかでも RS は，余暇活動の参加者を類型化する指標として多くの研究で用いられている．RS は，継続した余暇活動経験に伴う時間経過の過程で，技能や知識を修得し関与を高め，態度や価値観が変化し専門化すると説明されている．

余暇時間に行われるレクリエーションは，日常のストレスを解消させる活動として重要であり，主体的な余暇活動の実施に伴うレジャー満足度（Leisure Satisfaction: LS）は，人々の主観的幸福感（Subjective Happiness: SH）に影響を与えることが報告されている．すなわち，レクリエーション活動の継続的な実施に伴う LS の向上は，SH を向上させる可能性を示している．

SH に関する研究は，ポジティブ心理学や経済学などをベースとして，LS，生活満足度などとの関連が分析されている．また，余暇活動はポジティブな感情を高め，ネガティブな感情を低下させることが知られ，余暇活動と幸福感には正の相関関係があると報告されている．国際的な幸福感調査の結果においては，158 カ国中，日本は 46 位，米国が 15 位とされ，レジャー参加率に関しては，日本は米国に比べて低いと報告されている．このような，統計的なデータの比較は見られるものの，レクリエーション活動の専門志向化と SH および LS を国際的に比較した研究は見当たらない．

そこで，本論文では，「RS と SH・LS の関係」について，量的研究，国際比較研究，質的研究の 3 つの研究により追求することを目的とした．

第 2 章では，米国在住の釣り人 365 名を対象として RS 指標と SH および LS に関するデータを収集した．RS 指標は，確認的因子分析によって確認され，クラスター分析によって RS レベルを High・Middle・Low に類型化した．RS レベルと所得を独立変数とする 2 要因分散分析を行った．SH は RS レベルと所得の主効果が認められた．LS は RS レベルのみに主効果が認められ，多重比較の結果，SH 得点は，Low・Middle < High，$25,000 未満 < $25,000 以上であった．LS 得点は，Low < Middle < High であった（p<.05）．この結果から，RS と SH，LS の関係を明らかにし，RS の高まりによって，SH・LS が高まる可能性が示唆された．

第 3 章では，RS の国際比較のため，日米のスクーバダイバー1,017 名のデータを収集した．確認的因子分析によって RS 指標が修正され，多母集団同時分析から配置不変・測定不変モデルが確認された．クラスター分析によって RS レベルを High・Middle・Low に類型化した．SH・LS の得点を従属変数，RS レベル，所得，国を独立変数とする 3 要因分散分析を行った．SH は，RS レベル・所得の主効果が認められたが，国の主効果は認められなかった．多重比較の結果，Low < Middle < High であった．LS は，RS レベルと国の主効果，RS×国，所得×国の交互作用が認められ，単純主効果の検定から，国において，日本は Low < Middle < High，米国は，Low < Middle・High であった（p<.05）．国×所得は，$150,000（1,500 万円）以上のみ差はなく，それ以外は日本<米国であった（p<.05）．日米による部分的な違いはあるが，RS の高まりによって，SH・LS が高まる可能性が示唆された．

第 4 章では，RS の形成過程および RS が SH・LS に与えた影響について検討するために，経験が豊富な 19 名のスクーバダイバーを対象として半構造化インタビューを用いてデータを収集した．RS の形成過程における RS のタイプ，及び RS が SH・LS に与えた影響の因果関係についての質的分析を試みた．SH への影響において，ダイビングの重要性・中心性に関する発話は認められるが，RS 形成過程において SH が高まるといった具体的な発話は少なく，RS と SH の因果関係を明らかにすることが出来なかった．一方，LS は，RS の形成過程において向上し，ダイビングに対する LS は継続され，その質も高まったとする発話がなされた．すなわち，継続的な活動による RS の過程で LS が継続，向上したことが推察され，因果関係が示唆された．RS の過程で，ダイビングの目的や志向を変化させ退屈感を低減し，LS を維持した者が複数みられたことは，退屈感による LS の低下の先行研究を支持するものであり，第 2・3 章で RS レベルが高い者が LS も高いことを支持するものであった．また，RS の概念による RS タイプの類型化の有効性を支持するものであった．

以上のように，本論文は，これまで取り組まれていなかった，海洋スポーツ・レクリエーションにおけるレクリエーション専門志向化と主観的幸福感，レジャー満足度の関係を明らかにした．